広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第61号　2012　299－308

占領下の日本における家庭科教育の成立と展開（XXVI）

― 既製型紙の導入による被服教育の改革 ―

柴　静　子

（2012年10月２日受理）

The Establishment and Development of Homemaking Education in Japan under the Occupation (XXVI)

― Reform of the clothing education by using ready-made sewing pattern ―

Shizuko Shiba

Abstract: The purpose of this report was to grasp the reform of the clothing education in upper secondary schools under the occupation. By the examination of the educational documents and the film of pattern making, the following points became clear as a result of the investigation. 1. After the World War II, as for the learning of the dressmaking in the high school home economics classes, a change was required about the method of using printed patterns. 2. Kiku Yamamoto as a homemaking administrator in the Ministry of Education and M. Williamson as a educationist in the CI&E made the plan of using ready-made sewing patterns for shorten time to make clothing. 3. The Japanese committee made a lot of printed patterns and reference books for using them in the high school classes. 4. "PATTERN FOR Smartness" was the film produced by Simplicity Co. in 1948. It was the excellent film to use ready-made sewing pattern in the school.

Key words: reform of the clothing education, secondary school, pattern, under occupation, Civil Information & Education Section

キーワード：被服教育の改革，高等学校，型紙，占領下，民間情報教育局

はじめに

筆者は，昨年度の本学教育学研究科紀要において，1948年６月にCIE（民間情報教育局）の家庭科教育顧問として来日したD.S.ルイス（Dora S. Lewis）がニューヨーク州の家庭科カリキュラムを日本側委員会に提供したことによって，『学習指導要領家庭科編高等学校用昭和二十四年度』（1949年８月29日発行）の骨子が作られたということを，完成した学習指導要領と同カリキュラムの内容の類似性を比較する方法で検証した[1)]。

学習内容・方法において，日米の類似性は高かったが，中には両者で相当異なるものもあった。その一つが被服製作に関するものであり，小さな原型を作成させ，それを実物大の型紙に引き伸ばして使用させるという日本式の学習方法と，原型・型紙の作成は行わず，そのまま身体にフィットする実物大の市販型紙を選んで使用させるというアメリカ式の方法には根本的な違いが見られた。

このことについて説明を加えると，ニューヨーク州の高等学校２年生用のカリキュラム『HOMEMAKING ２』の単元２「わたしらしい装い」の中には，基本的学習５「市販型紙を用いて簡単な衣服を製作する」という内容があり，次のような13の「望ましい経験と活動」があげられていた。①必要な裁縫道具を示し，再検討する。用途や手入を実演する。②ミシンを使う能

力を演示する。必要ならば，実践する機会を設ける。③現在の衣装を研究し，要求を表にする。④ファッション雑誌や市販の型紙ブックを研究する。⑤「PATTERN FOR Smartness」（ハイカラ衣装のための型紙）といった映画を視聴する。⑥身体測定を実演する。２人１組になり，測定をして記録する。必要な型紙のサイズを決める。⑦必要な衣服の簡単な型紙を選択する。⑧市販の型紙の調整と利用，知るし付けの方法，まち針留め方，裁断を実演する。⑨自分の型紙と材料に関する使用法を応用する。⑩必要があれば，基礎的裁縫プロセスを実演する。完成までのさまざまな段階でのプロセス・モデルを研究する。⑪衣服を製作したり，調整したりする際に，モデルや教師の指導によって，型紙の補正法を理解する。⑫スタイルや似合うかどうか，仕上がりはどうか，という観点から，完成した衣服を評価する。⑬利用できる時間と生徒の能力に従って，さらに衣服やアクセサリーを作製する[2)]。

一方，昭和24年度の学習指導要領では，主に高校１・２年生女子が選択履修する科目である「一般家庭」の『被服目録』の単元２「製作」において，スカート，ブラウスまたはワンピースドレス製作の学習活動が次のように示されていた。①体型ならびに目的によって型をきめる。相互批判。②採寸の相互研究，実習。③原型の製作実習。④原型の活用とその研究。⑤全体の調和について，よい見本の展示，スタイルブックを観察し，図に表してみる。⑥ブラウス，スカートの調和を実物標本その他を用いて研究。⑦材料とデザインの関係研究。⑧どんな被服が涼しいかの研究。⑨型紙の製作実習。⑩地直しと布の裁ち方実習。⑪縫い方実習，仮り縫い補正，本縫い。⑫しあげ実習。⑬費用の計算，相互比較，研究。⑭着用・鑑賞・自己批判・相互批判。⑮手入れについて研究。⑯耐久力記録調査。⑰製作記録・報告書作成[3)]。

被服構成の授業の実際を想定して，『HOMEMAKING ２』の単元２の①～⑬と学習指導要領の①～⑰を比較してみると，所要時間や教師の指導上の負担という点では圧倒的に後者が大きくなることが予測できる。それは，指導要領で示された被服製作学習に，時間を要し，なおかつ生徒がなかなか到達できない「③原型の製作実習」，「④原型の活用とその研究」および「⑨型紙の製作実習」が組み込まれているからである。

それでは，アメリカのように市販型紙を使用して，製作時間の短縮と教師の負担軽減を図り，能率を上げることが学校教育として最善の策であると考えてよいのか。例えば，指導要領に示された方法をとると，立体である人体に対して平面の布をどのように裁断し，縫製すれば，美しく活動的に纏うことができるのかという根本的な原理を，実習を通して体験的にかつ時間かけて丁寧に教えることができるという利点もあるのである。その他の理由も含めて，家庭科教育の中に既製型紙を導入することは是か非かという議論が関係者の間で盛んになされたのがこの時期の特徴であった。

未だ既製型紙導入の是非を巡る議論が収束を見ない時期に，高等学校家庭科に型紙教育を導入することを政策として強力に進めたのが，文部省の家庭科事務官を務めていた山本キクであり，CIE の家庭科担当官，M. ウィリアムソン（Maude Williamson）であった。

山本キクは，家庭科ナショナル・リーダーとして，1950年10月11日に羽田を出発し，約３ヶ月にわたる米国教育視察旅行を完遂し，1951年１月24日に帰国した。山本がアメリカで実際に見聞し，日本の家庭科教育に取り入れようと決意したものは数々あるが，とりわけ被服教育に導入したいと考えたのは既製の洋服型紙であった。山本の米国視察記には，「被服における標準寸法は丁度計量カップに匹敵するもので，全国統一されたものがある。それで型紙のサイズも既製品のサイズも同じ寸法によって作られ，ニューヨークでもオクラホマでもサンフランシスコでも同じ標準寸法によっている。ここに裁縫の学習指導の容易さがあり，家庭生活の簡易さがある[4)]。」と述べられている。

このようにアメリカ視察の機会を得て，山本は，型紙の導入こそ家庭生活の能率化が求められているこの時代の家庭科教育に必要なものであると痛感した。そこで，1951年12月に発行に至った「中学校学習指導要領　職業・家庭科編（試案）」の女子向き課程の第１学年「単元２　よい身なり」と第３学年「単元３　わたくしに似合う服装」において，型紙の選択・補正の能力育成を図ることを主眼の一つにするように，という文言を入れたと伝えられている。

だが，この時点では，中学生が使用できる既製型紙は，「文化社」が発行しているスカートやワンピースなど，15種類程度に過ぎず，またそれらが比較的高価だったことなどの理由から，教育現場への浸透のスピードはそれほど早くはなかったと考えられる。しかし普及のスピードはさておき，アメリカで市販型紙の学校現場への進出を実地見聞し，そのような被服学習に価値を見出した文部省家庭科教育係官の考えが反映された教育政策であったことは銘記したい。

一方，先に述べたように，高等学校への既製型紙の導入に関しては，CIE のウィリアムソンの強い意向を背景として，山本と当時の被服教育界の実力者が結集した文部省内委員会が主体となって，各種型紙や使い

方の手引書が次々と発行される，という経過をたどった。

今回の研究では，これまでの筆者の研究を発展させて，高等学校被服教育のイノベーションともいえる既製型紙と手引書の発行に焦点を当てて，その実態を明らかにすることを第１の目的とした。第２の目的は，『HOMEMAKING ２』でも視聴が奨められている型紙宣伝映画「PATTERN FOR Smartness」（1948年制作）[5] を今回入手できたので，山本ら家庭科のナショナル・リーダーたちが米国で眼にした被服製作学習と極めて近い内容であるこの映画を32コマの静止画として提示し，当時の家庭科がめざした被服製作の姿を視覚的に理解することである。文献解読のみではなく映像や写真を通して被服教育改革の具体像を把握したいと思う。

１　被服教育を転換させた既製型紙と手引き書の発行

（１）高等学校の被服教育改革への視座

先般来述べているように，戦後の家庭科教育において注目すべきものの一つが，学校用の既製型紙の出現による被服教育の改革であった。そこでここでは，高校の被服教育のターニングポイントとなった『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』[6] の出版がウィリアムソンの発案によって手がけられ，山本らの日本側委員会の努力によって，1952（昭和27）年に全国家庭科教育協会から発行されるに至った経緯と，その後の展開について，型紙利用の手引き書の内容にも触れながら述べたい。

1949年７月から1951年６月まで，CIE の家政教育担当官として日本に滞在し，占領教育政策を策定したM. ウィリアムソンは，任期中に東京から離れて頻繁に各地を訪れ，新しい家庭科教育の進捗について，その実態を把握しようとした。そして中等教育研究集会の折などに，都道府県の家庭科指導主事やリーダー的な教師に向けて，実地見聞によって知り得た教育上の問題点について率直に述べ，改善の必要と方向性を示した。

被服教育については，製作に膨大な時間をかけているにも拘わらず生徒の技能は上達していないと捉え，その主たる原因は，原型から型紙を製作させることに相当な時間を費やしているためである，と考えた。そこで，日本の学校でもアメリカのように既製型紙を普通に使用することが必要であり，そのための条件整備が緊急の政策課題であるとした。

当時，高校の家庭科で使用できる既製型紙は数少なく，それも婦人用のサイズとデザインであった。そこでウィリアムソンは型紙プロジェクトを発足させ，女子生徒用の既製型紙を作成させて，全国の高校に普及させるという大がかりな被服教育改革計画を立てた。

（２）型紙プロジェクトの発足

型紙プロジェクトは1949（昭和24）年９月に発足した。まず，ウィリアムソンが全国の家庭科指導主事や家庭科教師に協力依頼をして，女子生徒の採寸データを文部省に集めた。文部省内に型紙を作成するための委員会が結成され，委員が選定されたのは，採寸データがほぼ出そろった1950（昭和25）年８月のことであった。当時，被服分野で活躍していた成田順（お茶の水女子大学教授），渡辺ミチ（東京学芸大学助教授），杉野芳子（ドレスメーカー女学院長），原田茂（文化服装学院教授）に加えて，山本キク（文部省家庭科担当事務官）が委員に任命された。

CIE の週間報告書（Weekly Reports）には，CIE と文部省における型紙完成までの取り組み（1949年10月～1951年４月）が次のように段階的に記されている。①数千人におよぶ女子高校生の採寸計画が立てられ，ウィリアムソンは中国地区中等教育研究集会（1949年10/17－10/22：於広島）に参加していた家庭科指導主事にこれを提示して意見と協力を求めた。②女子生徒の採寸は順調に進んでいる。③12,000人の採寸データが文部省に送られている。専門家が標準寸法を決定する作業をしている。④採寸データが整理されているが，不正確なものが多く，これまでの被服実習の効果が疑われる。また教員養成にも問題がある。⑤プロジェクトは標準寸法の決定まで進捗し，現在は学校で使用される型紙の研究に入っている。⑥型紙研究のために文部省内に委員会を設置した。成田順，渡邊ミチ，杉野芳子，原田茂，山本キクの各氏が委員に任命された。⑦８月に結成された委員会は，型紙の試作品を完成させるに至った。型紙を南多摩高等学校の生徒に合わせてみて，現在，修正中である。⑧お茶の水女子大学附属高校の女子生徒を使って，作成された型紙の２度目のチェックを行っている。⑨完成した型紙を印刷し，説明書を付けて協力校へ配布する段階になっている。⑩委員会は，出版予定の実際の型紙を準備する段階に来ている。⑪作成された型紙が協力校へ送られる段階になっている。⑫被服教育への型紙導入プロジェクトの第１段階が完了した。次の段階は，型紙の印刷と出版，そして被服指導を魅力的にし，また時間の節約のために型紙の使用を促進させること，及びそのために教員を訓練することである[7]。

以上のように，ウィリアムソンと文部省の型紙委員会のメンバーは被服製作の合理化を既製型紙の導入と

いう切り口から図ろうとした。しかし著名な洋裁学校講師の「便利だという理由でパターンを採用するのであろうが，学校教育では便宜主義ではなく，それを学んで知り，技術として身につけることが大切だ[8]。」という懐疑的な意見が示しているように，元来，型紙導入については賛否両論があった。だが当時の日本社会では，ディオールのニュールックスタイルに代表されるように，アメリカやヨーロッパから魅力的ファッションが流入し，これに刺激されて空前の洋裁ブームがおきていた。また外で働く女性も急増しているという事情もあって，従来の原型から型紙を製図するという時間のかかる過程を必要とせず，流行の洋服を簡単に作ることのできる既製型紙は歓迎され，婦人雑誌の附録などを通して急速に家庭に普及していた。

このような洋裁の時代の到来を背景として，文部省による型紙作成は必然のものと考えられ，女子生徒用の型紙の発行が期待された。そして，1952（昭和27）年３月，高校の被服教育の概念と方法を転換する『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる型紙』が全国家庭科教育協会発行，教育図書株式会社発売という形で出版された。これは，CIE の企画力と委員会の努力および各地の家庭科指導主事や教師また生徒の協力の賜であった。定価30円のこの型紙は，ブラウスが基本型など３種類，スカートがタイト，タック，６枚はぎ，フレヤーの４種類であり，各々に「特大」・「大」・「中」・「小」という４つのサイズが準備されていた。生徒の様々な体型に対して，４つのサイズがあれば，補正をすることで適用できると考えられていた。

（３）『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』に影響したアメリカの既製型紙

先述の型紙プロジェクトの進展の経緯から分かるように，『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる型紙』はアメリカの影響を強く受けたものであった。

この当時アメリカでは，シンプリシティ，マッコール，バタリックなどの大手型紙会社が，ハイスクールの女子生徒用に魅力的なデザインと多様なサイズの型紙を生産し，提供していた。シンプリシティの型紙は，中央布やわき布などをあらかじめ裁断してパーツにしたものであり，柔軟性のある薄いハトロン紙を使用しているため，まち針や虫ピンを通すことができた。従ってピンで重ね合わせた型紙を仮縫いの要領で着装し，体に合うように型紙の補正をすることが可能であった。その後，パーツを布の上に置き，まち針を打ち，裁ち切り線に沿って布を裁断する仕組みであった。

一方，文部省の型紙委員会が作成したブラウス３種類，スカート４種類の型紙は，どれも同じ形態であった。１枚の大きなハトロン紙にパーツが印刷されており，裁ち切り線で切り取って，パーツを自分で作るようになっていた。ピンでパーツを縫い合わせて仮縫いができ，補正もできるように材質を柔軟かつ破れにくくしているという点でアメリカのものと酷似していた。

物品の輸入が制限されていた当時，おそらくウィリアムソンは，自国の学校で普通に使用されている型紙の実物を研究させることが日本での型紙作成においては不可欠と考え，見本となる型紙を取り寄せて委員会に与えたのであろう。そこで委員会は，見本型紙を検討し，仮縫いと補正が可能であることを基本としながらも，１枚の紙から切り取ってパーツを作るという点で独自性をもつアメリカ式型紙を作成し，教育現場に導入することを考えたと推測できる。

（４）『型紙の使い方の手びき』の発行

『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』が出版されて間もない1952（昭和27）年８月に，文部省は指導の参考書として『型紙の使い方の手びき』（文化社）を発行した。

この中で山本は，「原型の製図と型紙の製作にかける時間と労力を縮小することにより，生徒の被服学習への興味を高めるとともに，目的に応じた被服の選択等の実際的な指導が可能になること並びに型紙活用技術が身につくことによって，洋服の製作が容易になり，被服生活の進歩，ひいては家庭生活の進歩に役立つ」と手びき発行の趣旨を述べ，あわせて本書の普及を願うことばを記している[9]。

この『型紙の使い方の手びき』においては，型紙を仮縫いし，着用した後の型紙補正の方法並びに実際に仮縫いをした被服の補正ついて，分かりやすい説明文をつけた多数の図を使用している。これらに多くのページ数をあてていることから，型紙による被服製作でのポイントが両者の「補正」にあると考えられていたことが窺われる。

（５）『かり縫いのできる ZKK 型紙』および『ZKK 型紙の活用法』の発行

この後，『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』は紙の材質や印刷様式はそのままにして，『かり縫いのできる ZKK 型紙』と名称変更され，ブラウス（A）とスカート（B）に加えてスリップ（J）まで，10種類が発行された。1953（昭和28）年７月のことである。

このような仮縫いが可能な既製型紙と『型紙の使い方の手びき』の発行を受けて，1954（昭和29年）２月に出版された文部省著「高等学校家庭科被服指導書（中）」では，ブラウス，スカート，ワンピースドレスの製作説明の際に，「型紙の使用法」という項目を設

けている。ワンピースを例に取ると，「型紙を使用する場合は，バストサイズの合ったものを選んで，そのほかの部分は自分の寸法に合わせて補正してから使用する（「型紙の使い方の手びき」参照）」[10] と記載され，既製型紙とそれの使用法を記した「手びき」による製作学習が奨励されている。

さらにこの年の８月には，『かり縫いのできる ZKK 型紙』の発行に続いて『ZKK 型紙の活用法』（全国家庭科教育協会）が出版され，既製型紙の高等学校被服学習への浸透が一層図られた。『ZKK 型紙の活用法』には，山本による「洋裁を学ばれる皆さま方に」と題した次の文章が添えられている。

休む時間と余暇を生み出すために，私達はできるだけ仕事を短い時間にじょうずにするようにくふうしなければなりません。そのくふうの一つがこの型紙裁縫なのです。これによって原型をとり，好みの型に引き伸ばすという時間が節約されるのです。したがって原型をこしらえたり型紙引きのばしの勉強をする必要もなく，それだけ骨折らずに洋服裁縫ができるようになります。（中略）また原型から型紙を引きのばして洋服を縫ったからといって，ほんとうによいものができるとは限りません。からだのとおりに作ったために，体の欠点がそのまま洋服に出て，かえってあわれな姿に見えることもあります。こうなるといずれの場合にも補正がたいせつだということになります。それで原型から型紙までの手数を省いて，いきなり型紙を使って一足飛びに仮縫いをし補正の勉強をする方が遙かに賢いではありませんか。アメリカでは小学校・中学校・高等学校・大学まで型紙を使って能率増進にけん命です。各家庭でももちろん型紙裁縫ばかりです[11]。

以上の文章には，戦前，戦中と和裁教育の指導者であった山本が，戦後は文部事務官としてウィリアムソンと連携して日本に新しい被服教育を打ち立てる責務を負ったことや，アメリカの学校における洋裁学習の実際を見聞した経験などを経て，それまでの日本の裁縫教育を批判してまでも家庭科の中に型紙の導入を図ろうとした信念と熱意が窺われる。

（６）『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』の普及と終焉

これまで述べてきたように『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』は，アメリカの型紙の影響を強く受けていたこと，またその後に開発された型紙のベースとなったという点で画期的であった。この最初の型紙はどのように普及されようとしたのか。

その一例としてあげられるのが，1952（昭和27）年３月27～29日に全国家庭科教育協会第３回総会が東京で開催されたが，そこで文化服装学院の原田茂が型紙の使用方法の実地講習を行ったことである。また同年11月に広島大学教育学部福山分校で開催された「第１回中国・四国家政科・家庭科研究協議会」では，会場内に展示場が設けられ，この型紙が出品されて，多くの教師が眼にし，手に取ることになった。さらには，『型紙の使い方の手びき』の発行も型紙教育への理解を促した。このように実地講習，展示会，型紙の使い方の手引書，家庭科被服指導書等を通して，既製型紙の存在が徐々に知られていったと考えられる。

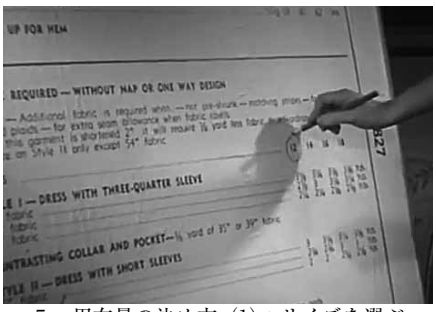
しかし，仮縫いはできるが一つのスタイルしか製作できないアメリカ式型紙は，高校家庭科が「一般家庭」から「家庭一般」に移行した時期に，婦人雑誌の附録につく実物大型紙に近いものに取って代わられた。1956（昭和31）年に全国家庭科教育協会から出版された新しい型紙『ⓩ型紙』がそれである。例えばブラウスであると，１枚の紙に，標準サイズで，身ごろ，襟，袖等が重ねて印刷されており，必要な線を色鉛筆でなぞり，その上に透けて見え，仮縫いのできるハトロン紙などを置いて写し取ることによって，基礎と応用の計７種類のデザインの型紙を作成することができた。

このような改良と同時に，新しい型紙の活用法についての手引書『家庭一般用型紙の活用法』(全国家庭科教育協会編）が発行され，型紙の教育現場への浸透は進んだ。例えばウィリアムソンの既製型紙作製に採寸という形で協力した広島県立竹原高等学校の家庭科の教育課程を見ると，1952（昭和27）年度のカリキュラムには導入されていなかった型紙が，1954（昭和29）年度の『一般家庭』には明確に位置づけられ，「型紙使用について理解しその能力を養う」という目標のもとで，学習内容として「型紙補正：補正寸法の研究と補正実習」が取り上げられている。

以上の背景があり，1956年の『高等学校学習指導要領　家庭科編　昭和31年度改訂版』では，「家庭一般」から「仕立」まで，内容として被服製作を含む場合は，「型紙の扱い方」という項目が明記された。

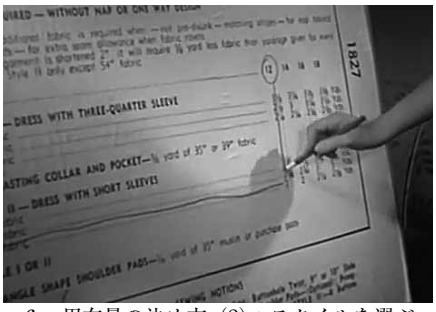
これまで述べてきたように，占領下で生まれたアメリカ式の仮縫いのできる型紙は，学校現場でそのままの形で長く使用されることはなかった。だが，「仮縫いと補正ができる型紙とその使用手引き書によって，被服製作の時間短縮と簡便化が可能になり，余った時間を教養を深めることに費やすことができる」という，旧来の被服教育を転換する考え方を生んだ具体物として，この型紙には特別の価値があるといえよう。

1．シンプリシティ社の型紙映画の題名「PATTERN FOR Smartness」



5．用布量の決め方（1）：サイズを選ぶ

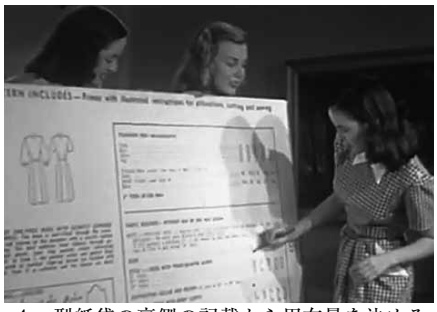
2．シンプリシティのドレス型紙の外装



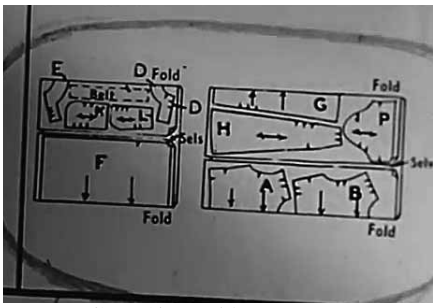
6．用布量の決め方（2）：スタイルを選ぶ

3．作りたい洋服に適した布を選ぶ

7．型紙が工場で製造される場面の一部



4．型紙袋の裏側の記載から用布量を決める



8．工場で型紙が配置されプレスされる

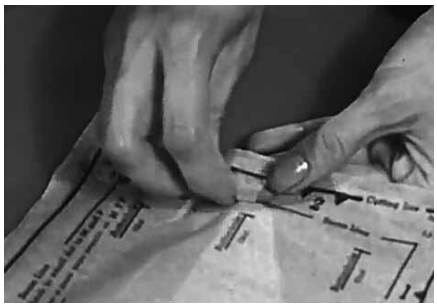
図１　映画「PATTERN FOR Smartness」の場面（1）

２　映画「PATTERN FOR Smartness」が示した型紙洋裁

占領期にアメリカに派遣された17名の家庭科教育のナショナル・リーダーの中に山本キクがいたことは先述の通りである。それ以外にも戦後の被服教育改革に深く関わった人物として，当時，東京学芸大学で被服学を担当していた渡辺ミチがいた。

9．注文した型紙がシンプリシティから届いた

13. 型紙をパーツに戻して布上に配置する


10. 型紙のパーツを取り出し仮縫いを始めた

14. パーツ配置は縫製仕様書を参考にする

11. 型紙を仮縫いして次第に紙の洋服ができる

15. 型紙と布を重ねてまち針で止める

12. 仮縫いした紙の洋服を着て体に合わせる

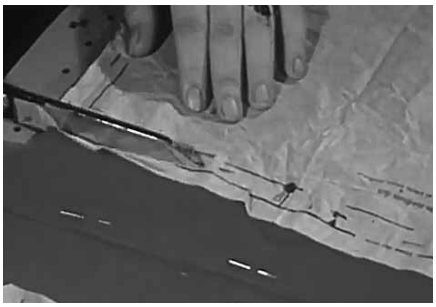
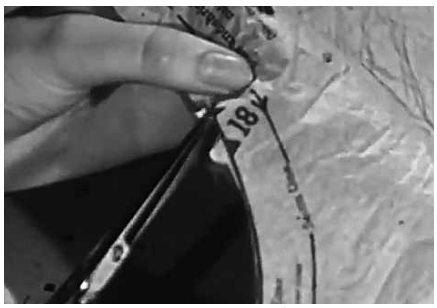
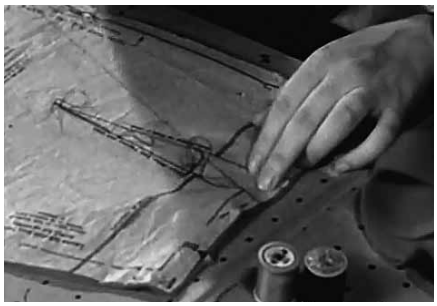

16. 型紙と布地を一緒に裁切り線で裁つ

図１　映画「PATTERN FOR Smartness」の場面（2）

渡辺は視察旅行の終着地でCIEに報告書を提出している。1951（昭和26）年４月のことである。この報告書の中で，「マッコール社やシンプリシティ社など発達した米国の型紙産業のもとで，家庭科において既製の型紙が自在に使われている授業風景を目の当たりにし，わが国の被服教育においても既製型紙導入の研究が急がれる。」と記している。帰国後には，「アメリカの家庭科教育を視察して」という題名で『家庭科教


17. カーブラインに切れ込みを入れる

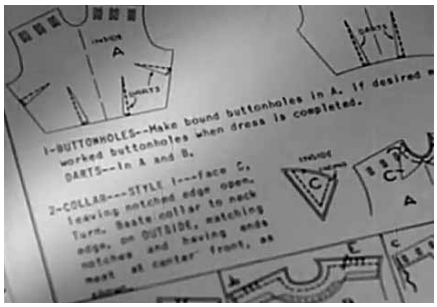
21. 縫製仕様書に従って仮縫いをする


18. 型紙の上からしつけ糸でしつけをする

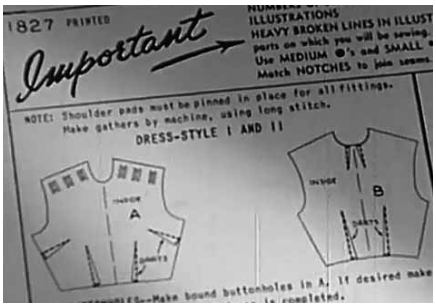
22. 仮縫いの洋服がようやくできた

19. しつけ糸を切り「切りじつけ」にする

23. 背面にたくさんのしわが入っている



20. 型紙袋に入っている「縫製仕様書」



24. 仕様書を見て補正の方法を知る

図１　映画「PATTERN FOR Smartness」の場面（3）

育（25巻９号）』に寄稿し，「スタイルブックすら容易に手に入らず，原型の製図から始めなければならない日本とは全くくらべものにならない。」と，アメリカの型紙による効率的な被服教育に感嘆し，現状に甘んずることなく，常に進歩を求めてやまないアメリカ人の積極性に接してつくづく考えさせられた，と述べている[12)]。

型紙による教育を視察して，このような思いをもっ

25. 背面のしわを取るための補正をしてもらう

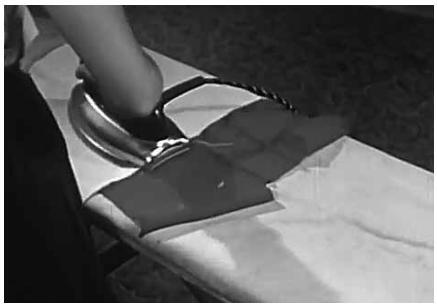
29. 丁寧に「切りじつけ」の糸を取り除く

26. ミシンを使って本縫いを始める

30. 手伝ってもらって裾の長さを決める

27. しつけ糸に沿って縫い進めていく

31. 裾あげの幅を決めまつり縫いをする


28. アイロンをかけて形を整える

32. ニュールックスタイルの赤いワンピースが完成して得意満面のベティ

図１　映画「PATTERN FOR Smartness」の場面（4）

たのはひとり渡辺だけではなかっただろう。山本はもとより，その他のナショナル・リーダーたちも，型紙使用がもたらす効率的な製作学習の様子を目にして，「これからの日本の被服構成学習のあり方は正にここにある」と感激し，導入への信念をもったに違いない。

それでは追体験として，現在の私どもがそのような教育を目にすることはできないだろうか。もし映像が存在し，私どもが視聴することができたとすれば，型

紙による日本の被服教育の転換がより深く理解できるに違いない。そのような考えで映像をリサーチしたところ，当時のニューヨーク州家庭科カリキュラムでも取り上げられている，シンプリシティ社制作のカラー映画「PATTERN FOR Smartness」がアーカイブとして復刻されていることが分かり，DVD の形で入手が可能となった。

図１は，約19分のこの映画のストリーが理解できるように32のシーンを選び，簡単な説明文をつけたものである。映画の内容は，「ベティはボーイフレンドのジョニーに新しい洋服を見せたくて，シンプリシティの型紙を使ってニュールックスタイルの赤いワンピースを手早く，上手に作る。型紙を注文してからドレスが出来上がるまでの制作工程は，段階を追って丁寧に描いている。まずは，どのように型紙を選択するかが示され，次いで，型紙の仮縫いの方法，型紙の布への配置方法，まち針の打ち方，裁断のしかた，しつけの付け方，切りじつけの方法，仕様書に従った縫製方法，仮縫いの仕方，背中部分のしわの補正方法，本縫いの方法，アイロンがけ，裾上げの仕方とまつり方が示され，最後に美しいドレスが出来上がる。ジョニーはクラブの活動資金を集めるために，ベティにファッションショーを開くように提案する。ベティはたくさんの友だちにドレスの製作を依頼し，ある日，素敵なファッションショーが開かれた。」というものである。

この映画では，「①シンプリシティの型紙を使って，②最新流行のニュールックスタイルのドレスが，③簡単に早く縫い上がる」ことが主張されている。先に，山本による「洋裁を学ばれる皆さま方に」という文章を紹介したが，そこに記された既製型紙推奨の理由と見事に重なるのである。さらには，前述の渡辺が発した「アメリカの型紙による効率的な被服教育に感嘆した」といういささか大仰なことばにも，確かに「PATTERN FOR Smartness」を見ると納得できるのである。

おわりに

CIE のウィリアムソンが被服教育改革の要として手がけた高等学校女子生徒用既製型紙の発行は，山本，渡辺ら日本側関係者の才覚と熱意により，彼女の帰国後に実現した。アメリカの学校用既製型紙に類似したこの型紙は，その後改訂されながら，日本独自のものへと発展していった。既製型紙導入の必要性については，アメリカ側も日本側も同様の意識をもっていた。それは，家庭生活の改善のために，原型から型紙を製図する時間を省くことによって，被服製作を能率的に行なわねばならないという考え方に基づいていた。

昨今の中・高等学校家庭科では，被服製作を全く行わないケースやあらかじめ裁断線をつけた布地を使用して，簡単な布製品を製作させることに留まっているケースも少なくない。家庭科の先生方が学校用既製型紙誕生の経緯を知り，これに対する興味や関心を深めるとともに，型紙使用の意義をよく理解して，積極的に製作学習の中に導入されることを期待したい。

【引用・参考文献】

1）柴静子『占領下の日本における家庭科教育の成立と展開（XXV）―『昭和二十四年度学習指導要領家庭科編高等学校用』」の底本となったニューヨーク州の家庭科カリキュラム―』「広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部」第60号，2011，pp.249-258.

2）『Planning Guide HOMEMAKING EDUCATION』: The University of the New York, The State of New York Bureau of Home Economics Education, 1950, pp.79-82.

3）文部省『昭和二十四年度学習指導要領家庭科編高等学校用』，中等学校教科書株式会社，1949，pp.11-13.

4）山本キク「アメリカの家庭科教育を視察して（その３）」，『産業教育』第１巻第３号，1951，p.31.

5）「PATTERN FOR Smartness (1948)」，『Classic Clothing Designer Films』, Quality Information Publishers.

6）『わが国ではじめて作られたかり縫いのできる最新式型紙』，全国家庭科教育協会，1952.

7）“Weekly Reports-Vocational & Technical Education”, GHQ/SCAP, CIE Records, Box no.5754.

8）西島芳太郎「パタン主義の洋裁指導に就いて」，『家庭科教育』第22巻7号，1948，p.30.

9）文部省『型紙の使い方の手びき』，文化社1952, pp.1-2.

10）文部省『高等学校家庭科被服指導書（中）』，実教出版1954，p.87.

11）全国家庭科教育協会編『ZKK 型紙の活用法』，文教書院1954，巻頭言（ページ無）.

12）渡辺ミチ「アメリカの家庭科教育を視察して」，『家庭科教育』第25巻９号，1951，p.11.